

マウスが人より利口でなぜ悪い……。

ハントされるのはマウスか人か？

文／金丸弘美 (かなまるひろみ/エッセイスト)

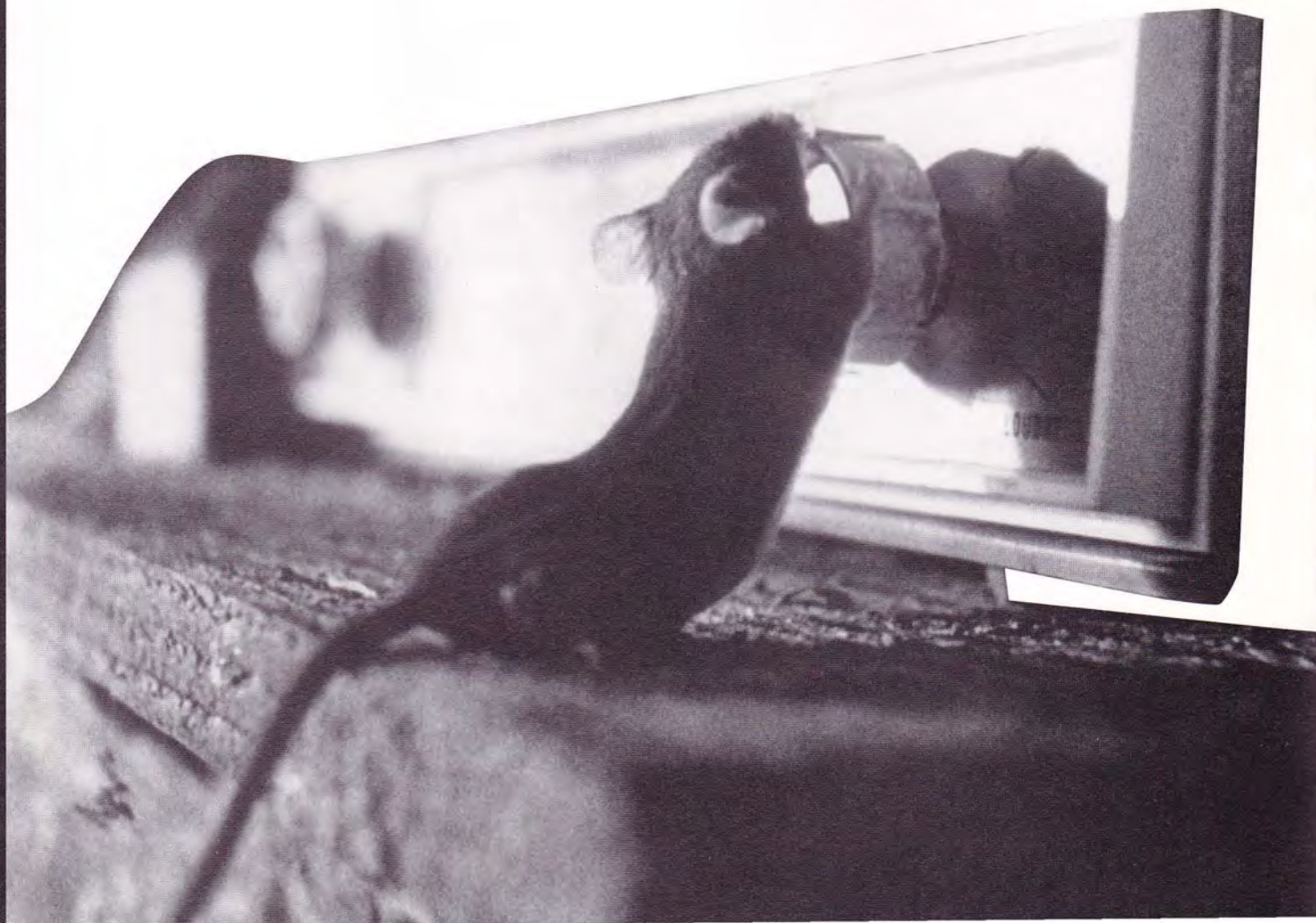
まず、このシチュエーションが面白い。まるで、チャールズ・デッケンズの『オリバー・ツイスト』や、ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』、あるいはフランク・キャブラ監督の『素晴らしき哉！人生』のような、人生讃歌劇をおもわせるような展開から始まる。

それは、父親が二人の息子に、兄弟仲良く事業を継ぐことを諭すような言葉で始まり、また登場するいかにも古い、まるで人生と歴史ををしみ込ませたような工場の様子などに、よくあらわれている。おそらく監督も、そのあたりを意識したに違いない。ヒューマンドラマ的展開の枠組みが見事だけに、後半でしっかり並んだフルコースの料理をひっくり返すような面白さにつながってくる。しかも、細部にこだわりながらも、この映像の流れがシャープで、どの部分もあきさせないようになっているのが見事。

この主人公の純朴で朴訥な弟と一儲けをたくらむ兄という相反するキャラクター設定もオーソドックスなのだけど、コンビのボケとツッコミという主人公たちの緩急の間も楽しい。

そして、この最大の魅力は、何といてもネズミだ。ネズミといえば、これもドイツのサイレントの傑作、吸血鬼をテーマにした『ノスフィラテ』や、ディズニーの『ミッキー・マウス』やMGMの『トムとジェリー』を始め、最近では『インディーズ』まで、主役から脇役まで、映画には欠かせないキャラクターの一人(!)なのだ。

ということは、この『マウスハント』、これまでの映画の歴史を網羅しながら、なおかつスタイリッシュな映像と、現代的なテンポで心地よく見せ



てくれるコメディになっている。

さて、このネズミが実に可愛くて頭がいい。二人の兄弟の裏の裏をかいて、映画そのものをひっかけまわす痛快な展開をみせてくれる。ここで使われるネズミ。資料によれば、ネズミ色の野ネズミとなっているが、どちらかというこれは飼育用のネズミなのかもしれない。

ネズミは、マウスという言い方とラットという言い方をするが、マウスは二十日鼠のような実験用などの小さめのネズミ、そしてラットとは、ドブネズミのような大きめのものを指すようで、使い分けがされている。ここではマウスの方なのだろう。

それはともかく、主人公たちを翻弄してしまうネズミだが、果して、こんなふうなネズミたちがいるのだろうかと思うかもしれないが、実は、想像以上にネズミの頭はよくて、人の裏をかくことは日常茶飯事。だからこの話はほとんど信憑性があるといっても過言ではない。

あまりご存じないかもしれないが、現実にもこの映画のようなネズミたちが、日本でも、ほんのすぐそばで大活躍(?)しているのである。

最近、密かに話題になっているネズミに“スーパーラット”呼ばれるものがある。彼らは最初ロンドンで発見され、ついでニューヨーク、数年前は東京でみつけた。このスーパーラットとは何かというと、正体はクマネズミである。なぜスーパーラットと呼ばれるかというと、ネコイラズをまいても平気なネズミなのだ。

もともとクマネズミは、林の中に住んでいた。ところが、ビル化の中で、林が伐採されて、住む家を失ったクマネズミはビルに住むようになったのである。これまで住宅街では体の大きいドブネズミの天下だったのが、ドブが少なくなり、軽々と木登りのできないドブネズミは、住処をクマネズミにとって替られることになる。

さて、このビルに住むクマネズミの駆除のため

に、大量のネコイラズ(殺鼠剤)をまくことになった。最初は効果もあってよかったが、妊娠してからたった21日で生まれてしまうネズミたちは、世代交代の度に抗体を強め、ネコイラズを食べても死なない“スーパーラット”を生み出したのである。そればかりではない。ネズミは頭がよくて、毒を盛ったとしても、一度察知すると同じ手はくわないという賢さも持ち合わせているのである。

おまけにクマネズミは、体が小さくてどんどこにも入り込めるし、まさに映画と同じように細い針金の糸のようなどころでも、まるで地上のように身軽にスイスイと登ってしまうのだ。

このスーパーラットたちは、ビルの壁の裏側に巣を作り、暖房と人が集めたさまざまな食べ物で快適な暮らしをしているのである。住処が住処だけに、容易に人が入れない。だから、彼らは危険を感じないで住むことができる。

ただ住むならなんてことはない。ネズミは齧歯類と呼ばれる仲間の一つだが、ご存じのように独特の歯がある。これがどんどん伸びるのである。だから絶え間なくなにかを齧っていなければ前歯が伸びすぎて、物が食べられなくなる。彼らは手当たり次第に齧る。スーパーラットは、アルミだってコンクリートだって齧ってしまうのだ。さらにコンピュータの回線やガスのゴム管まで齧って、事故が発生することだって現実に起きているのである。

そんな彼らをやっつけようと、彼ら好みの音波を流して誘導して捕獲する方法といったことも試みられているようだが、なかなか思うように成果は上らないようだ。結局は、ビル内では、ネズミの通り道を捜し出し、そこに粘着シートを置いて、ネズミを捕獲するという、もっともオーソドックスな方法が、この都会で、しかもこれだけ発達したと思われる科学の時代に実際に行われているのである。

これまでネズミは食料があるところに出現すると思われていた。ところが最近、住宅地に出現しているのである。実際、ある邸宅で、天井がガサガサするのであるさくて仕方がない。そこで、ネズミ駆除会社の人に見てもらったら、天井にネズミの歩いた跡がぎっしり。とうとう天井を外してしまったということが報告されている。だから『マウスハント』で、ネズミが郊外にポツンと建っている一軒の家に、まるで我が家のように住んでいるという設定も、全くの作り話ではない。いや、真実そのものだ。さらにネズミの知恵が人を上回り、全ゆる場所をすり抜けて家の裏側をスイスイ登ってしまう、これも本当の話なのだ。クリストファー・ウォーケンのネズミ駆除業者が、悪戦苦闘をするさまがあって笑わせるけど、これ嘘のようである。

もっともネズミは悪いばかりでなく、常に人のそばにあって、いい例え、十二支に出てくるし繁栄の意味で使われることもある。様々なことを見ていくと、この映画は本当に緻密でよく作られているコメディというだけでなく、人とネズミの在り方をもうまく取り込んだ作品といっている。

